

西宮歴史調査団ニュース 第13号

西宮市立郷土資料館 兵庫県西宮市川添町15番26号 〒662-0944 電話 0798-33-1298

竜吐水と火災報道

衣笠周司（竜吐水班）

はじめに

『西宮歴史調査団ニュース』第8号の「竜吐水、精いっぱい働いた！」（小著・2018年4月14日）をまとめた後も、新聞記事に取り上げられた火災報道について調べを進めていた。すると気になる記事をいくつか見つけた。

明治のころも、当然のことながら、火災が起きると懸命の消火活動がされてきた。竜吐水をはじめ、いろんなポンプを駆使して消火に当たる様子が、新聞に報道されている。

ただその記事を読むと、現代の感覚からは、非常に違和感を感じる。そうした文章をピックアップして、当時独特の火災報道を竜吐水と絡めて探ってみた。

なお、竜吐水とは、江戸時代後半から明治のころに使われた木製手押し消火用ポンプ。また引用文は一部を平仮名にしたり、読みやすいよう意識を試みた。

1. 焼死者、被災者への配慮は？

まず次の記事から

灰燼中より二名の男らしき焼死体を発見せるものの、この死体は両手足なく、全部黒焦げとなりて、わずかに臓腑の少しばかりをとどめ居るものにて、酸鼻の極みなる。（東京朝日新聞・明治34年2月19日・神奈川県三浦郡三崎町火災）
このあと続けて該当する人の氏名も掲載している。

明治25年の東京・神田の大火の記事では
いかに逃げ道を失いけん。兄弟ともども生きながらの荼毘、むなしく白骨のみ残れるを両親が来て声を限りに泣き叫び…。（東京朝日新聞・明治25年4月12日）

と、表現し、この記事のあとには
ものぐるわしき体なりは道理道理。
これだから火は粗末にはできませんよ。
という文章を付け加えて締めくくっている。

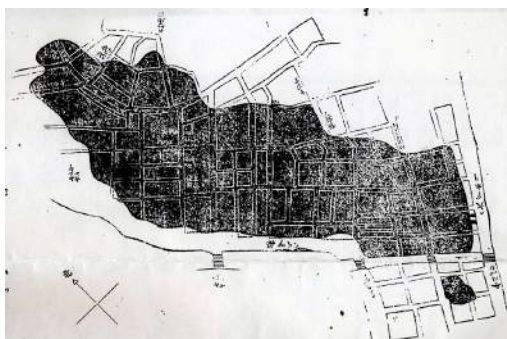


写真1 当時の火災報道では、焼失した個所を黒塗りした絵で示している例が多い
＝『東京日日新聞』明治25年4月12日

こうした文調は、被災地の町並を表すときにも使われている。

神戸を中心に発行していた又新日報が、神戸・多聞通の火事に際して
(出火した) 同町の裏手に住居するものは、多分細民のみなれば。(明治19年7月
23日)

という表現をしている。他にも

この地は鮫が橋に隣りて山の手にて貧民の巢窟なり。(東京日日新聞・明治23年
2月27日)

この辺に住まう者は、河岸の立ちん棒、土方の手間取り、その日暮らしの食うや食
わずの者多ければ。(東京日日新聞・明治25年4月12日)

という表現もある。

竜吐水が使われていた時代には、このように報道記事の差別的な表現や、人権意識
の乏しさを見ることができる。その背景となる風潮は、次の史料からも見ることがで
きる。

明治12年(1879)の朝日新聞の発行許可願の中で

勸善懲悪の趣旨をもって、もっぱら婦女子を教化に導くものにして、紙面にさし絵を
加え傍訓(ふりがな)を付し、児童といえども一見してその意を了解しやすからむ。
と述べている。講談調、戯作風がわかりやすさに通じると思われていたのだろうか。

当時、これを批判する向きもあった。日本新聞は明治22年の「創刊の辞」の中で、
この風潮を「俗の趣向に投じ…定見あるなく、ほしいままに文筆を弄して、ただひた
すら読者の意を迎え」ていることを批判している。

では現代ではどうかというと、「新聞倫理綱領」(平成12年6月21日制定)で「人
間の尊厳に最高の敬意を払い、個人の名誉を重んじプライバシーに配慮する」と定め
ており、報道記事もおおむねこれを守っている。

2. 火災報道は、美文調で

美文調で次の記事が書かれている。

罹災者の逃げ惑い泣き叫ぶさま、目も当てられず、焦熱地獄もかくやあらん。

助くる者、助けられる者、さながら夢に夢をたどるがごとし。(東京朝日新聞・
明治44年5月10日・山形大火)

消火のため、そこへポンプが駆けつけてくる。

三方の火勢はいずれ劣らぬ猛勢にて、到底人力の敵すべきさまなく、蒸気ポン
プもなんの甲斐なきありさま。(同上)

だという。

東京・神田の火事の報道では「唧筒(ポンプ)の力と、ここの空き地で火勢が
削がれ、わずかに防ぎ止めたのは、まことにめでたく、歓ばしきかぎり。」(東
京日日新聞・明治23年2月27日)と記事で感激している。

ポンプの活躍ぶりを続けてみよう。

消防組その他とも、この先より駆けつけて数台の小唧筒にて防ぐとは見えられ
ども、風火の勢いには勝つよしもなく、おのおのあぐみ果てて…。

小ポンプではこの火災に太刀打ちできない。そこへ

汽笛の響きに先きを払わせて、三台の蒸気唧筒(ポンプ)は走せ来たりて…川水
を滝のごとくに注ぎかくる。(東京日日新聞・明治23年2月28日・東京・浅草

大火)

竜吐水は放水の筒先が本体直付けなのに対し、吸水口と放水口を設けてホースをつなぐなどで性能アップした腕用ポンプというのものもある。「小唧筒（ポンプ）」とはこうした類を指すのだろう。

さらには蒸気機関を使って水を揚げる「蒸気ポンプ」が当時の最先端。火災では頼もしがられていたことが、この記事でわかる。

西宮市内では、竜吐水は西宮市立郷土資料館、山口町郷土資料館などに収蔵、腕用ポンプも神戸女学院大学などで保存されており、当時こんな光景が見られたと思われる。

3. 竜吐水より水鉄砲？

このように明治の新聞記事では、竜吐水はあまり評価されていなかった。もっと残念なことに、明治以前にも評判は芳しくなかった。

『徳川幕府事典』によると、寛延4年（1751）に町名主が「竜吐水は壊れやすいし、費用がかかるので使用に反対」と町年寄に伝えている。

また宝暦5年（1755）にも名主が「使用に反対」の意見を出している。消火活動に使う場合は、竜吐水本体を狭い路地などに運び込むことが無理なうえに、竜吐水まで水を運ぶことが苦労だとして嫌われた。

さらに平常時の維持管理をするにも費用がかかって困るという。竜吐水より水鉄砲を並べて放水する方が効果的とまで言われていた。

その後も竜吐水は使われ続けた。弘化2年（1845）3月には『布告』が出されて「竜吐水を、出火の際に員数通りに持ち出さない消防の組があると聞か、定め通りに出動しないなら沙汰に及ぶ」という内容が記されている。

また、報道面の記事ではないが、写真2のように新聞の付録やチラシに竜吐水などポンプ類の広告掲載が見受けられた。

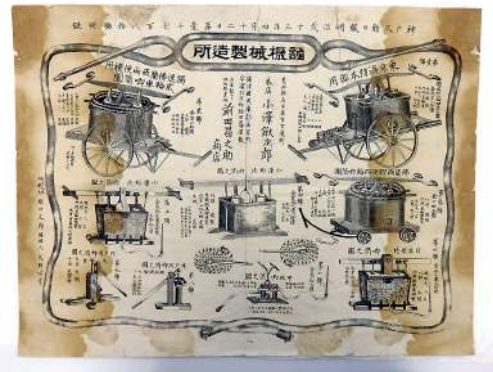


写真2 各種の唧筒（ポンプ）類の広告が掲載された『又新日報』1780号（明治23年4月12日）の付録
=西宮市立郷土資料館蔵

4. 電柱が燃えてしまった！

火事の記事に、妙なこだわりを見つけた。

（大阪大火で）南警察署より警察本部までの電話柱は、長堀筋にて十一本、問屋筋より白髪橋まで三十本消失したるが（普及の着手へ…）また大阪電灯会社にて焼失せし電柱は二十五本にして、その線は三千尺以上に及ぶ。（東京日日新聞・明治23年9月5日）

（山形市の大火で）電話柱百三十が類焼。（東京朝日新聞・明治44年5月10日）
といった調子で、現在ではあまり報道の必須要素にはなっていない電柱類に、紙数

を費やしている。

電柱の話は『錦絵新聞』にも出てくる。『錦絵新聞』とは明治初期に新聞記事を浮世絵に描いて売り出した娯楽紙で、いわば現代の写真週刊誌のようなもの。

写真3の錦絵新聞は『東京日々新聞』111号の記事で、沼津で火事があったとき、電線の柱が燃えかけたので、相撲の関取二人が火中に飛び込んで「家を倒し柱を抜き猛火をしずめ電機（でんしん）を救いし鬼神を欺く怪力」で大功績だと讃えている。電信柱の類は文明開化の当時としては重要なニュース価値があったのだろう。

錦絵新聞では、その他にも火事を扱った記事が見られる。

写真4の錦絵は『勸善懲悪錦画新聞』第7号から。纏を振り、鳶口で破壊消防をしている。その手前下の方に白い筋が6本ほど描かれている。おそらく竜吐水などからの放水ではないか。

もっとも、この錦絵の主題は「美談」である。画面奥で手を合わせている女性は、自宅から火を出したので隣家へ類焼しないようにと水垢離をして鎮火を祈る婦人であることが、絵の中に記事として書き込まれている。

以上、竜吐水などのポンプ類と報道記事について関連を見ながら、紹介してみた。

【ご協力に感謝】西宮歴史調査団・倉田克彦さん

<参考文献>

- ・『徳川幕府事典』竹内訳編（東京堂出版、2003年）
- ・『江戸町触集成』第15巻 近世史料研究会編（塙書房、2001年）
- ・『取材と報道』（日本新聞協会、2002年）
- ・『新聞の行動原理』小林信二著（毎日新聞社、1971年）
- ・『又新日報』明治19年7月23日
- ・『東京日日新聞』明治23年2月27、28日
- ・『東京日日新聞』明治23年9月5日
- ・『東京日日新聞』明治25年4月12日
- ・『東京朝日新聞』明治25年4月12日
- ・『東京朝日新聞』明治34年2月19日
- ・『東京朝日新聞』明治44年5月10日
- ・『毎日新聞』1993年6月22日夕刊
- ・『新聞錦絵展』（ジャーナリズム史研究会、1988年）
- ・『幕末・明治のメディア展』（早稲田大学図書館、1988年）



写真3 『東京日々新聞』には関取2人が電線の柱を抜こうとしている姿が…



写真4 『勸善懲悪錦画新聞』には鎮火を願う神仏祈願する女性が描かれている

里帰りした竜吐水

衣笠周司（竜吐水班）

はじめに

西宮市内に残存する竜吐水の製作所と同時期に操業していた製作所について調べていくうちに、珍しい「竜吐水の旅物語」と出会った。

約100年前、京都で生まれた竜吐水が、はるばる沖縄まで旅をしたのち、また京都の南丹市まで帰ってきた、というのだ。

「竜吐水」とは、明治の中ごろまで導入されていた木製の消火用のポンプのこと。

この旅物語の主人公となる竜吐水は、京都府南丹市立文化博物館に所蔵されている。かつて同館で開かれた「歴史を伝える資料たち」展（2013年）の際には公開されたこともあったが、現在は収蔵庫でひっそり眠っている。

1. 旅で見つけた「園部村」の文字

話は約40年前にさかのぼる。

昭和57年（1982）2月に、京都・園部町の住民グループが、沖縄を旅行していたときのこと。那覇市で伝統工芸館「首里琉染」を訪れ、展示されていた竜吐水に目を惹かれた。そこには思いもかけぬ文字や刻印が記されていたのだ。

竜吐水の側面の板には「園部村」と大きく横書きされ、さらに縦に小さく「字横田區」とある。

別の側面には「明治二拾六年八月新調」と記されている。明治26年は1893年。いまから100年以上も前のことである。

そして刻印は「本家唧筒（ポンプ）商 京寺町 平井權七」と読める。



写真1 竜吐水（南丹市立文化博物館所蔵）

園部の竜吐水
横木の長さ 約2.7m
横幅 約1.0m
水槽の縦と深さ 各60cm
参照：『南丹市立文化博物館だより』第1号



写真2 「園部村」銘拡大



写真3 製作者名 刻印

2. どこで、だれが？

この話を進めるにあたって、私は次のことを調べてみた。

まず側面に書かれていた「園部村」とはどこか。

京都府船井郡にあった村で、2006年1月1日に船井郡八木町、日吉町、北桑田郡美山町の3町と合併して「南丹市園部町」となった。

そのとき同村にあった「園部文化博物館」が現在の「南丹市立文化博物館」と改称して再出発した。

主人公の竜吐水は、刻印の「本家唧筒（ポンプ）商 京寺町 平井権七」で作られ、当時の京都府船井郡園部村の横田区へと買い取られていったことがわかる。

園部で、明治のころには火災に出動し、消火に活躍した竜吐水だったのではないかと考える。やがて性能のいいポンプが次々に登場。古くなった竜吐水は、ひっそりとお蔵入りしてしまったことだろう。

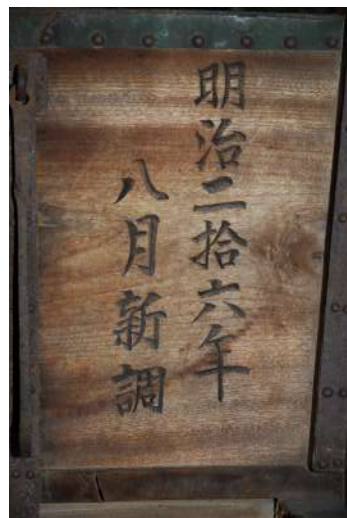


写真4 紀年銘

3. 京都市内の竜吐水屋さん

次に私は竜吐水の素性を探ろうと、製造販売した「平井権七」を探してみた。

『京都市姓氏歴史人物大辞典』にその名があった。記録によると次の通りである。

「平井権七」は、嘉永6年（1853）に平井権三郎の次男として生まれた。平井家は当時、京都市寺町通松原にあり、江戸中期に「亀甲屋」の屋号で唧筒（ポンプ）の製造販売を始めた。

平井家は代々「権七」を継いでいたようで、園部の竜吐水が作られた明治26年（1893）は六代目が当主のときである。そのころ店は「竜吐水屋」と称されて、北陸、山陰、中国地方にも販売網を持つようになっていた。西宮に保存されている竜吐水に平井権七のものは、いまのところ見当たらず、井上利兵衛、川邨卯兵

衛、北村源兵衛など大阪の工房で製作されたものが多い。

この六代目権七は明治15年（1882）に京都府会議員になっている。

『京都府会議員列伝』によると、平井権七は幼名を武次郎といい、兄が病身のため、次男だが家督を継いだ。元来、商業に熱心で、かねてから舶来ポンプの高価なことを憂い、研究を積んで善良な品を製造するに至った。近府県に販売するポンプの数も少なくなかった、という趣旨のことが記されている。

また大阪朝日新聞の大正12年（1923）6月24日の記事によると、東京・帝国ホテルで開催された営業税廃止大会発起人会には京都から平井権七が出席したなどと、府議としての活動ぶりも報じられている。

4. 海を渡って沖縄まで

さて、主人公の竜吐水は、お蔵入りしていたはずだったが、いつの間にか買い取られて、沖縄にまで運び込まれていた。

沖縄旅行中にそれを発見した冒頭の住民グループは驚いた。一行はとりあえず写真を撮って園部へ帰ったが、それが話題となり「なんとか園部に戻せないものか」と、展示していた「首里琉染」へ打診することになった。

『南丹市立文化博物館だより』第1号（2007年3月31日）などによると、いきさつは次のようになる。この竜吐水が展示されていた紅型・サング染め工房「首里琉染」は沖縄県那覇市首里山川町にある。

竜吐水は、「首里琉染」の山岡古都・前館長（故人）が昭和38年（1963）ごろ、知人を通じて購入したもの。それを同館に展示していた。

山岡前館長は2005年10月に亡くなったが、館長を引き継いだ娘の大城裕美さんから「父が元のあるべきもの、と気にかけていたので返却したい」と連絡があった。

そこで文化博物館側が送料を負担して、竜吐水は2007年2月に園部へと送り戻されてきた。

竜吐水として1893年に新調されてから114年、園部の村落を1963年に旅立ってからは44年ぶりの里帰りが実現したのだ。

園部の住民からは、祖先の人たちの苦労をしのぶとともに、郷土を見直すすが



写真5 竜吐水の里帰りを紹介する『南丹市立文化博物館だより』2007.3 No.1

にしたい、などと喜びが語られ、大城館長も「懐かしく思っただけなら」と話していた。

文化博物館では、早速ロビーに竜吐水を展示をして公開。『南丹市立文化博物館だより』の第1号では、市民に紹介するために、トップ記事として写真入りで、大きく詳しく取り上げた。

5. 竜吐水の取り持つ縁

同博物館の資料や当時の報道によると、この話には余話がある。

2007年2月の竜吐水寄贈を受けて、4月に園部・横田区の歴代区長6人が沖縄に出向き、「首里琉染」の大城裕美館長にお礼の訪問をした。区長側からは、「首里琉染」の大切なものを寄贈いただいて住民たちが大歓迎をしている、旨のお礼を述べた。大城館長は「喜んでいただいて本当にうれしい」と答えたという。

そして同じ2007年の秋に、今度は沖縄から「首里琉染」の大城館長が京都へ。南丹市立文化博物館を訪れ、ロビーに展示中のポンプと対面。今後の交流を約束しあったという。

こうして里帰りした竜吐水が、両者の交流を取り持つ役割を果たしたことを確認して「旅物語」は終わる。

竜吐水は、2021年現在、南丹市立文化博物館の収蔵庫に保管されているので、普段は見ることができない。だが調査などの要件があれば、事前に利用申請書を出すことで閲覧可能とのこと。同博物館の犬持さんは「今後の具体的な計画はないが、展示会などで活用していきたい」と話している。

<謝意>次のお二人にご協力いただきました。

- ・京都府南丹市立文化博物館・犬持雅哉さん
- ・西宮歴史調査団・清水貞夫さん

<写真出典>

写真1～5は、南丹市立文化博物館。

<参考文献>

- ・『南丹市立文化博物館だより』第1号 2007年3月31日
- ・『京都市姓氏歴史人物大辞典』（角川書店）1997年9月
- ・『京都府会議員列伝』佐野精一（金口木舌堂）1894年12月
- ・『大阪朝日新聞』1923年6月24日
- ・『京都新聞』2007年3月8日
- ・『琉球新報』2007年4月4日
- ・『琉球新報』2007年4月24日
- ・『沖縄タイムス』2007年4月24日

西宮歴史調査団は、団員に登録した市民が主体となって、西宮市内の文化財を調査し、記録を作成する文化財調査ボランティア活動の団体です。西宮市立郷土資料館が主催しています。
西宮歴史調査団ニュース 第13号 令和3年（2021）8月20日